

## 『古今六帖』 版本系本文を溯る― 『歌枕名寄』 との関わりから―

福田 智子

『古今六帖』の現存諸本は、写本系統と、寛文九年版本を代表とする版本系統に大別される。その寛文版本の本文および傍書が、『歌枕名寄』所収六帖歌の本文に一致する傾向があることがすでに指摘されている。そこでさらに検討を加えたところ、『古今六帖』寛文版本の本文は、『歌枕名寄』諸本の中でも流布本系および万治版本に近いことがわかった。『歌枕名寄』は、諸本間で本文異同が生じている箇所が少なくなく、その伝来には、単なる書写活動とは異なる、類題集という場における和歌の再整理・再編集のための本文批判の姿勢が読み取れる。

## 一 問題の所在

『古今六帖』の現存諸本は、すべて同一祖本で、藤原定家所持本を源家長が書写・校合した本の系統であると目されているが、詳しくみてみると、写本系と版本系に分けられるという<sup>①</sup>。版本系とは、江戸期の流布本である寛文九年（一六六九）版本（以下、「寛文版本」と略す。）の系統に属する本を指す。寛文版本が刊行されるにあたり、元にした写本があったはずであるが、その写しは<sup>②</sup>あるものの、寛文版本が直接元にしたと指摘できる写本は未だ見出せない。そこで、寛文版本出版以前に、写本本文に手が加えられた可能性が指摘されている。早く富永洋子氏は、次のように述べている。

……寛文版本は、それ以前の過程に於て、誰かの手によつて、意識的な校訂がなされたのではなからうか。昔から僻事の多いので有名な古今六帖を、少しでも元の形に戻す為、原典のわかつているものは、六帖の作者表記や歌の本文に関して、明らかに間違っていると  
思われる箇所を、原典の方へ改めるという作業が行われたという可能性は十分に考えられよう。今後、寛文版本自体の性格や系統を考察していく場合、このことは、一つの問題点として、もつと検討を加えてみる必要があるのではなからうか。<sup>③</sup>

ここでまず言及されているのは、まず、『古今六帖』写本本文の乱れである。たとえば、『古今六帖』桂宮本、第一帖の奥書に、

すへてこの六帖、いかにやらん、いつれもくみなかくのみしとけなきものにて侍れば本のままにしるしをく、のちに見ん人心えさせ給へし<sup>(4)</sup>

という記述があることは、広く知られている。このような写本群の本文の乱れを、寛文版本は、後に修正したものと見るのである。

その寛文版本の本文が、実は『歌枕名寄』所収古今六帖歌(以下、「名寄所収六帖歌」と称する。)に近い傾向があることが、すでに滝本典子氏によって指摘されている<sup>(5)</sup>。

滝本氏は、『歌枕名寄』が成立したという十四世紀前半には、『古今六帖』の、現在する写本系本文よりも整った本文をもつ、版本系統の本が存在し、寛文版本もその系統の本に間接的にせよ拠ったのではないかと推定している。

この滝本氏の見解が発表された昭和五十年は、古典文庫の『歌枕名寄』も刊行中という時期であり、滝本氏は、『歌枕名寄』の本文として、江戸期の流布本である万治版本を使用している。だがその後、渋谷虎雄氏編『校本詞枕名寄 本文編』<sup>(6)</sup>が刊行され、写本群を視野に入れた考察が比較的容易になった。そこで本稿では、あらためて『歌枕名寄』諸本と『古今六帖』、とくに寛文版本との本文の関係について考察する。

## 二 『歌枕名寄』における『古今六帖』の位置

『歌枕名寄』は、周知のとおり、澄月なる人物による名所歌集である。畿内・東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海と、巻末の「未勘国」

に大分類され、それぞれ地名<sup>(7)</sup>ごとに名所詠が列挙されている。延元元年(一三三六)までに成立したかと考えられ、「名所歌集としては空前の規模を有するもの」と言われている<sup>(7)</sup>。渋谷虎雄氏によれば、現存資料による限り、『歌枕名寄』には、いわゆる種本は存在しなかったと想定され、「従って、編者は、数多の歌集・歌書を実際に見て編纂したのであるから、それは膨大な資料を披見可能な人物でなければならぬ<sup>(8)</sup>。」という。

そのような『歌枕名寄』の編者にとって、『古今六帖』はどのような存在だったのであろうか。この点を考えるために、まず、『平安和歌歌枕地名索引』<sup>(9)</sup>を繙いてみよう。この書は、「古今和歌集にはじまり、新古今和歌集初出歌人に至るまでの平安時代和歌を対象とした地名索引(凡例)で、約三千項目の歌枕・地名を掲出し、それを詠み込んだ歌を列挙したものである。このうち約六百七十項目の歌枕・地名は、ほぼ一条朝までで詠まれなくなったものであるが、注目すべきは、その中の約百四十項目は『古今六帖』に採られている歌、さらにそのうち約八十項目は、『古今六帖』の出典未詳歌であるという点である。つまり、一条朝までで消えてしまった歌枕・地名の一割強は、『古今六帖』の出典未詳歌に見られることになる。『平安和歌歌枕地名索引』は、今から半世紀近くも前に編纂された本であり、その後も少なからぬ写本が発見・紹介されているが、それでも、この時代の大まかな歌枕・地名の詠まれ方の傾向は看取されよう。『古今六帖』は、『歌枕名寄』にとって、編纂當時には用いられなくなった歌枕・地名の発掘に欠かせない歌集だったのである。

### 三 『古今六帖』『歌枕名寄』の現存伝本

『古今六帖』は、『新編国歌大観』では底本を宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本とする。桂宮智仁親王（一五七九～一六二五）他による江戸時代極初期の写本である。書写年代がわかる伝本は永青文庫本で、当時、禁裏に伝来していた行能卿筆本をそのまま書写したという、文禄四年（一五九五）の細川幽斎の書写奥書をもつ<sup>10</sup>。一方、江戸期の流布本は、前述の寛文九年（一六六九）版本である。黒田彰子氏『古今和歌六帖の本文と享受に関する総合的研究』（科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書<sup>11</sup>）には、これらを含めた主要伝本十三本が翻字されている<sup>12</sup>。

また、『歌枕名寄』は、『新編国歌大観』では、江戸期の流布本である万治二年（一六五九）版本（以下、「万治版本」と略す。）を底本とする。その他の写本については、前出の『名寄校本』に主要伝本十一本が収められており<sup>13</sup>、このうち、書写年代がわかる伝本は、『古今六帖』と同じく永青文庫本で、『名寄校本』はこれを底本とする。文禄三年（一五九四）の細川幽斎の奥書をもつ<sup>14</sup>。

本稿では、『歌枕名寄』の本文の引用を、万治版本を底本とする『新編国歌大観』に拠り、『名寄校本』所収の写本群を参照する。また、『古今六帖』は、桂宮本と寛文版本とを列挙し、黒田氏の報告書に載る主要伝本を参看する。

### 四 『歌枕名寄』の集付「六帖」

『歌枕名寄』万治版本には、「六帖」という集付が一七三箇所見出せる。

また、『古今六帖』を出典とすることを意味する「同」が一箇所ある。万治版本は、これら計一八四首を『古今六帖』の歌と認めていたと見られる。

ただし、集付を「六帖」としていても、現存『古今六帖』諸本には存しない歌もある。

『歌枕名寄』巻第二十、駿河国、雑篇、五二七四番 題「宇度浜」

（『校本』六九八頁、二九一九番）<sup>15</sup>

六帖

人しれずおもひするがのうどはまにあそぶ千どりのこゑぞつれなき

この歌は、万治版本の他、永青文庫本その他の写本にも存するが、永青文庫本には「六帖」の集付はない。集付「六帖」があるのは、高松宮家本・書陵部本・佐野文庫本である。もともと『夫木抄』にも、この歌は、結局に若干の本文異同を有するが、「六帖」歌として載っているため、現存『古今六帖』諸本にはない歌を、『歌枕名寄』や『夫木抄』が保存していると見られる。

『夫木抄』巻第十七、六九〇一番

（千鳥）

はま、六帖

読人不知

人しれぬおもひするがのうどはまにあそぶちどりのこゑのわりなき

このように、万治版本が「六帖」とする歌で、現存『古今六帖』諸本に

はなく、また、『新編国歌大観』内では他例もない歌は、他に四首（『歌枕名寄』三三四八・六三九二・六六六五・九六四七番）ある。さらなる検討を要するが、前述のごとく、『古今六帖』に現存諸本に古写本がないという状況を考えれば、『歌枕名寄』は失われた『古今六帖』の片鱗を垣間見せてくれる歌集と言えよう。

その一方で、「六帖」の集付が必ずしも『古今六帖』を指していない場合もある。

『歌枕名寄』巻第二、山城国二、嵯峨篇、六三二番 題「桂」

（『校本』七一頁、三六九番）

六帖 鮎

信実

あさなあさな日なみそなふるかつらあゆあゆみをはこぶ道もかしこし  
この歌は、万治版本以外にも、永青文庫本他の写本にあり、集付「六帖」も、永青文庫本・書陵部本・佐野文庫本・陽明文庫本に見られる、ただし、「新撰六帖」（静嘉堂文庫本）「新六」（高松宮家本）とする本もある。はたして、当該歌は、次に挙げるように、『新撰和歌六帖』の歌なのである。

『新撰和歌六帖』第三帖、九八四番

（あゆ）

あさなあさなひなみそなふるかつらあゆあゆみをはこぶみちもかしこし

（信実<sup>16</sup>）

この歌の場合は、静嘉堂文庫本や高松宮家本の集付が正しいことになる。そもそも、この「六帖」という集付がいつ記されたかという点でも、慎重を期さなければならず、これらをそのまま信じることはできないであろう。従って本稿では、万治版本の集付を手がかりとしながらも、「六帖」の集付のない名寄所収六帖歌をも視野に入れることにする。

## 五 『歌枕名寄』と『古今六帖』 出典未詳歌（一）

前述の通り、名寄所収六帖歌は、写本系本文ではなく、寛文版本と一致する傾向が見られると指摘されている。もともと、その歌が、『古今六帖』以外の歌集にも見出せる場合には、『古今六帖』という歌集の枠を超えて、別の歌集の本文の影響を考慮しなければならなくなる。そこでまず、『古今六帖』の出典未詳歌で、『歌枕名寄』にのみ他出が見られる歌、それも、『歌枕名寄』諸本間に本文異同のない例から考察しよう。

### ① 『歌枕名寄』巻第二十八、陸奥国下、七二二三番 題「片恋岡」

（『校本』九二六頁、三九七二番）<sup>17</sup>

六帖

みちのくにありといふなるかた恋のをかをわが身にそふるころかな

○『古今六帖』第二帖、一〇四〇番 題「をか」

「桂」みちのくにありといふなるかた岡のをかのわか身にそふるころかな  
ろかな

「寛」みちのくにありといふなるかたこひのをかをわか身にそふる比哉

②『歌枕名寄』卷第三十三、紀伊国、八四五七番 題「岩田河」

〔校本〕一一一六頁、四九八八番

六帖

岩田川 いはさへさわぎゆく水のしたはくづれておもふ比かな

○『古今六帖』第三帖、一五九〇番 「かは」

〔桂〕 いはた川 いそさへさくゆちかはのしたはくづれておもふころ

かな

〔寛〕 いはた川 いはさへさはき行水の下は崩れて思ふ比かな

③『歌枕名寄』未勘国（上）、九二六三番 題「片敷山」

〔校本〕一二六四頁、五六六一番

六帖<sup>19)</sup>

夏ごろもかたしき山のほととぎすなくこゑしげく成りまさるなり

○『古今六帖』第二帖、八六四番 題「山」

〔桂〕 夏ごろもうたしめやまのほと、きす 鳴声しげく成まさるなり

〔寛〕 夏衣かたしき山の時鳥啼聲しげく成まさるなり

④『歌枕名寄』未勘国（下）、九五三三番 題「梁瀬河」

〔校本〕一三〇四頁、五八六八番

六帖

やなせ河 ふちをさだめぬ世ときけば我が身もふかくたのまれぞする<sup>21)</sup>

○『古今六帖』第三帖、一五九三番 題「かは」

〔桂〕 よなつかは<sup>22)</sup> ふむせさためぬよときけは我もふかくたのまる、かな

〔寛〕 やなせ川 ふむせ定めぬよときけは我身もふかく頼まれぞする

①は、『古今六帖』写本系本文「かた岡のをか」に対して、寛文版本は「かたこひのをか」であり、名寄所収六帖歌は、後者と一致する。「片岡の岡」は、「岡」が重複しており、本文にやや疑念があるのに対し、「片恋の岡」は、歌の内容が明確である。

②も、第二句・第三句の異同を、『古今六帖』の写本と版本との対立として捉えることができる。とくに第三句を、写本系本文が「ゆちかは」とするのは、おそらく川の名と認めてのことであろうが、『新編国歌大観』を検しても、他例を見ない。また、『古今六帖』は「かは」、『歌枕名寄』でも「岩田河」という題なので、初句「岩田川」があれば、第三句をわざわざ川の名に解する必要性も低い。『古今六帖』寛文版本や『歌枕名寄』の「ゆく水の」は、意味の通りやすい本文でもある。

③の歌もまた、『古今六帖』諸本間で、写本系本文「うたしめやま」と寛文版本「かたしき山」との対立があり、名寄所収六帖歌は、寛文版本本文と一致する。この歌には、「なつぐれば深草山の郭公なくこゑしげくなりまさるなり」（拾遺集・夏・一二三・よみ人しらず・延喜御時中宮歌合）という表現が酷似する歌があり、その異伝と捉えてよいかもしれない。ただし、肝心の地名は「深草山」で、全く異なっている。地名に関していえば、『古今六帖』写本系本文の「なつごろもうたしめやま」という表現は、「なつごろもうたしめやまのほととぎすいまはきときにたちかへりなけ」（家持集・七六）という例がある。時鳥が鳴いて

夏の到来を知らせ、衣更えの準備を急がせるという情景は、当時の日常として理解できる。だが、「なつころもうたしめやま」という表現に見える「衣」を「打つ」という行為、いわゆる持衣は「冬支度」で、「主に晩秋の歌」であり、その観点から考えると、定石を逸脱した感がある。一方、「かたしきやま」の方は、『新編国歌大観』を検しても他に見当たらないが、「さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうぢのはしひめ」(古今集・恋四・六八九・よみ人しらず・題しらず・又は、うぢのたまひめ)に代表される「衣」と「かたしく」との組み合わせをもとに、「夏衣」「かたしき山」「時鳥」というように、夏の情景へと展開させた歌と見ることができる。

④では、『古今六帖』諸本間で、二箇所本文異同が存する。まず、写本系本文「よなつかは」と寛文版本「やなせ川」との対立である。いずれの地名も『新編国歌大観』では他例はないが、後者の「やなせ」は「梁瀬」(梁をしかけてある川瀬)と解することができるであろう。実際に和歌でも、「かはかみにゆふだちすらしみくづせくやなせのさなみたちさわぐなり」(詞花集・夏・七八・曾禰好忠・題不知)と詠まれており、地名のイメージは、寛文版本の本文の方が捉えやすい。また、もう一箇所本文異同は、写本系本文「我」が寛文版本では「我が身」になっており、音数律としても後者の方が整っている。

以上の例は、前に述べた通り、いずれも『歌枕名寄』諸本間において安定した本文をもつ歌である。それが、『古今六帖』の写本系にはなく、寛文版本のみに見られる本文であるとする、『古今六帖』寛文版本の本文は、寛文九年(一六六九)から遡って、『歌枕名寄』が成立したとされる延元元年(一三三六)には存在していたことになろう。なお、寛

文版本が、総じて和歌の表現類型に即した、整った本文であることも、あらためて注意しておきたい。

## 六 『歌枕名寄』と『古今六帖』 出典未詳歌(二)

ところで、『歌枕名寄』とほぼ同時期に編纂されたと見られる類題和歌集に『夫木抄』がある。撰者は、冷泉為相の門弟、勝間田長清で、延慶三年(一三一〇)頃の撰かと言われる<sup>24)</sup>。藤井紀久子氏<sup>25)</sup>、樋口百合子氏<sup>26)</sup>によってすでに指摘されているように、『歌枕名寄』はその『夫木抄』を見ていないという。つまり、『歌枕名寄』が『夫木抄』所収六帖歌によって、間接的に『古今六帖』歌を校訂する可能性はまずないと見られる。とすれば、『古今六帖』諸本本文の享受のあり方を考える上で、『歌枕名寄』と『夫木抄』のそれぞれが、『古今六帖』諸本のうちのどの本文に近いのか、写本系か版本系かといった点は、当時の『古今六帖』流布の様相を把握する上で、重要な視点であろう。そこで、『古今六帖』の出典未詳歌の中で、『歌枕名寄』の他、『夫木抄』にも載る歌を見てみると、はたして、『歌枕名寄』は『古今六帖』寛文版本に一致することが多いが、『夫木抄』は、写本系本文が垣間見える一方、版本系にも通じる点有する<sup>27)</sup>。以下、具体的に検証する。

### ⑤ 『歌枕名寄』 卷第二十四、近江国下、六三三三番 題「粟津野」

(『校本』 八三九頁、三五四八番)

六帖 小萩

思ひ出でて恋しくもあるかあはづのの小萩がはらにわがゆきしより

○『古今六帖』第二帖、一二〇〇番 題「こたかがり」作者「やかもち」  
「桂」おもひいて、こひしくもあるかあはづの、小萩か下にわかゆき  
しかり

「寛」思ひ出て恋しくもあるか粟津野の小萩か原に我ゆきしかり

※『夫木抄』卷第十一、四一四三番 題「萩」

同（家集）、六一

同（伊勢）

おもひいでてこひしくもあるかあはづのこはぎがもとにわれ行く  
しかり

⑤の歌は、『古今六帖』の写本・版本間での異同が存する。もっとも写本間では、「した」（永青文庫本・御所本・岡田真旧蔵本・田林義信氏蔵本）、「もと」（林崎文庫本・宮崎文庫本・和学講談所旧蔵本）といった異同はあるが、これは「下」（桂宮本・榊原家旧蔵本・松平文庫本・林羅山旧蔵本・兼築信行氏蔵本）という漢字表記から発生した読みの違いとして処理することができる。『歌枕名寄』は寛文版本の本文と同じであるが、『夫木抄』四一四三番歌は、写本系本文である。

⑥『歌枕名寄』卷第八、大和国三、竜田篇、二四四六番 題「竜田河」

（『校本』二九九頁、592番）<sup>28</sup>

六帖 滝 禊

たつた河たきのせきりにはらへつ ついはふこころは君がためとぞ（異  
同なし）

○『古今六帖』第一帖、一一九番 題「なごしのはらへ」

「桂」たつた河たきのせきりにはらへつ、いはひくらすは君がためとぞ  
立田川瀧のせきりにはらへつ、いはふ心は君がためとぞ

※『夫木抄』卷第九、三七八六番 題「荒和祓」

題不知、六帖

よみ人しらす

立田川たきのせわきにはらへつ ついはふ心は君がためとぞ

※『夫木抄』卷第二十四、一一〇一八番 題「たつた川」

たつた川、大和社、六四

順

たつた河たきのせわきにはらへつ ついのりくらすは君がためとぞ

⑥では、第四句に注目したい。『歌枕名寄』「いはふこころは」は、『古今六帖』寛文版本に一致し、写本系本文「いはひくらすは」と対立する。そこで『夫木抄』を見てみると、『古今六帖』寛文版本の「いはふ心は」という本文をもつ歌を収める一方で、「いのりくらすは」という、写本系本文に酷似した歌をも載せるのである。『夫木抄』を信ずれば、その編纂の段階で、当該歌は、「いはふ心は」「いのりくらすは」の両方の本文で享受されていたことになる。この異文は、それぞれに解釈が可能であり、どちらか一方に本文の傷があったために、意味の通る本文が新たに生み出されたといった類ではない。また、『夫木抄』で「たつた川」「荒和祓」題に分類されるにあたり、第四句の異文は、とくに影響しない。つまり、仮に歌の分類のために表現に手が加えられることがあったとしても、ここではその可能性は低い。『夫木抄』は、『古今六帖』の歌を採

るにあたり、複数の伝本を参照した可能性が指摘できよう。

このように考察してみると、『夫木抄』には、『古今六帖』の写本系・版本系それぞれの特徴的な本文が見出される。『夫木抄』の成立時には、双方の本文が、部分的にしる存在したのであろう。その点で、『歌枕名寄』は、『古今六帖』のより版本系に寄った本文を有すると言えよう。

## 七 『歌枕名寄』 諸本における歌枕認定の違い

以上の用例は、いずれも『歌枕名寄』 諸本間で歌の出入りこそあれ、本文異同はない歌であった。しかしながら、『歌枕名寄』 諸本を見てみると、その類の安定した本文ばかりでは当然ない。むしろ、『歌枕名寄』 自体が、『古今六帖』の歌をどのように取り込んでいくか、試行錯誤した痕跡が残っていることが少なくない。そのような用例の中で、諸本によって、歌枕の認定自体に揺れが見られる例を挙げておこう。

### ⑦ 永青文庫本『歌枕名寄』 卷第二十七、陸奥国上

(『校本』 九二六・九二七頁、三九七二～三九七四番)

片恋岡

六帖 みちのくにありといふなるかた恋のをかのわか身にこふる比

かな

現六 こゝにしもなにしけるらん玉さゝのうきふし、けきかたこひ

のをか

語森

かたらひの もりのことのはちりぬともおもひはやますまつそ

かはらぬ

○万治版本『歌枕名寄』 卷第二十八、陸奥国下、七二二三・七二二四番

片恋岡 杜

六帖

みちのくにありといふなるかた恋のをかをわが身にそふるころかな

(七二二三)

杜

同

かた恋の もりのことばのちりぬともおもひはやますまつぞかはらぬ

(七二二四)

この万治版本『歌枕名寄』七二二四番(永青文庫本では『校本』三九七四番)の歌は、諸本で歌枕そのものに本文の対立がある。すなわち、永青文庫本では「かたらひのもり」であるが、万治版本では「かた恋のもり」なのである。それにともない、永青文庫本では、「片恋岡」題の次に「語森」を置くが、万治版本では、題を「片恋岡」「杜」とする。永青文庫本の「語森」題は、万治版本にはなく、「かた恋」に統合された形になっている。また、永青文庫本の「語森」は卷第二十七の末尾近くに配されるが、万治版本では、「片恋杜」題は卷第二十八の冒頭付近で、当該歌前後の歌群の配置が、まるごと変更されている。

永青文庫本は、「全巻を完備する諸本の中では、結局比較的に見て」<sup>(30)</sup>「最も原撰本に近いもの」で、非流布本系とされている。本文異同の状況から見ても、「片恋岡」「語森」から「片恋岡」「片恋」森へという、『歌



枕名寄』諸本の成立過程を窺わせる例と言えよう。また、この万治版本と同様の本文は、流布本系の書陵部本（中院通勝他写）や佐野文庫本（江戸初期写）にも見える。

一方、六帖においては、写本系はすべて「かたらひのもり」で、「かたこひのもり」は寛文版本のみである。

○『古今六帖』第二帖、一〇五六番 題「もり」

「桂」かたらひのもりのことのはちりぬらんおもひの山のまつそかはらぬ  
「寛」かたこひのもりのことのはちりぬれと思ひの山のまつそかはらぬ

「ら」と「こ」という、よく似た字形の、わずか仮名一文字の異同ではある。しかしながら、『古今六帖』では「もり」題の歌としていずれの本文でも題には抵触しなかったものが、『歌枕名寄』では、「語森」「片恋森」という、全く異なる歌枕の認定につながり、それぞれの本文が、題により固定されることになる<sup>⑧</sup>。

ここで、『歌枕名寄』諸本のうち、永青文庫本など非流布本系と、流布本系・版本との本文の対立が、『古今六帖』の写本系と版本との対立に、そっくりそのまま当てはまることに留意したい。当該箇所<sup>⑧</sup>の歌枕は、おそらく永青文庫本のような「片恋岡」「語森」というのが元来の本文であったろう。『古今六帖』においても、写本群は総じて「かたらひ」であった。それが、『歌枕名寄』流布本や万治版本のように、「片恋岡」「片恋森」というように「片恋」にまとめられた理由としては、まず、新たな資料の出現による修正の可能性が考えられよう。すなわち、『古今六帖』寛文版本のもととなるような本文をもつ写本の存在を、現存未確認ながら

想定してみるのである。あるいは、次節で詳述するように、寛文版本に先立って刊行された可能性のある『古今六帖』の無刊記本が、『歌枕名寄』本文に影響を及ぼすという状況もあり得ないことではないだろう。だがその一方で、この異同は、連続するふたつの歌枕の間で、題の「語森」の「語」一文字が脱落しただけでも誘発されてしまう。「片恋岡」「語森」という題の連続が「片恋岡」「森」になった時、和歌本文も「かたらひ」から「かたこひ」になるのは容易であろう。そのような類題集ならではの場も、あるいは作用したかもしれない。

ともあれ、⑦の例を見る限り、『古今六帖』寛文版本は、『歌枕名寄』諸本の中でも、永青文庫本をはじめとする非流布本系ではなく、流布本系や万治版本の本文に一致する傾向にあるのではないかと予想される。世上への影響力を考えれば、万治版本との関係が重要になってくるだろう。

## 八 『古今六帖』寛文版本の傍書と『歌枕名寄』

これまで、『古今六帖』寛文版本の本行の本文に着目し、『歌枕名寄』との関係を考察してきたが、実は、寛文版本の傍書も、『歌枕名寄』本文に一致する傾向があることが、やはり滝本氏の前掲論文に指摘されている。中でも、前節で指摘した『歌枕名寄』流布本や万治版本は、ここでも注目すべき伝本であると考えられる。

⑧ 『歌枕名寄』卷第十一、大和国六、三二四一番 題「磐余池」

〔校本〕四一五・四一六頁、1045番

六帖

あだなりと名にしいはれの池なれば人にねぬなはたのまざりけり

いはれのいけ、大和

池、六三

読人不知

この歌は、『歌枕名寄』写本間で歌の出入りがあり、永青文庫本・高松宮家本になく、静嘉堂文庫本にある。また、第二句の傍線部分には異同はないが、結句の傍線部には異文があり、右の万治版本のように「たのま(ざりけり)」とするのは、流布本系の書陵部本と佐野文庫本である。

○『古今六帖』第三帖、一六七〇番 題「いけ」

「桂」あたなりと名にしいはれの池なれば人にねぬなはたつにざりける  
「寛」あたなりと名にしいはれの池なれば人にねぬなはたつにざりける

一方、『古今六帖』では、第二句の傍線部分は、写本系本文はすべて、本行は「な(名)には」である。この中には、「は」に傍書「しイ」をもつ本がある(桂宮本・永青文庫本・御所本・林崎文庫本・和学講談所旧蔵本)。また、結句の傍線部分「たつに」については、「たへ」(宮崎文庫本・和学講談所旧蔵本)という異文はあるが、「たのま(ざりけり)」という本行本文は、『古今六帖』伝本にはない。また、傍書「たのまい」があるのは寛文版本のみである。

以上の点を総合的に考えると、『古今六帖』写本系本文の一部に見られる傍書「しイ」は、『古今六帖』諸本内での校合、すなわち、『古今六帖』寛文版本の本文に拠って、記入され得るものである。さらに視野を広げれば、次の『夫木抄』本文との接触による可能性もあろう。

※『夫木抄』卷第二十三、一〇七三六番

あだなりと名にしいはれの池なれば人にねぬなはたつにぞ有りける

だが、『古今六帖』版本の傍書「たのまい」は、『古今六帖』諸本にも見出せず、『夫木抄』にも求めることができない。本稿の調査範囲内では、『歌枕名寄』の万治版本と、流布本系の二本の写本を挙げるにとどまる。可能性からいえば、前節末尾で指摘したように、『歌枕名寄』万治版本との関係が浮上してこよう。

⑨『歌枕名寄』未勘国(下)、九五四〇番 題「忘河」

(『校本』一三〇五頁、五八七五番)

六帖<sup>32)</sup>

わすれ河よく道なしと聞きてこそいとふの神にたちもよりけれ

この歌の第四句の「に」は、『歌枕名寄』諸本においては、佐野文庫本が傍書「ハイ」をもつものの、すべて本行は「も」である。これは、次に挙げる『古今六帖』諸本の本行本文と一致する。

○『古今六帖』卷第三、一五八〇番 題「かは」

「桂」わすれ川よくみちなしとき、てこそいとふのかみもたちはよりけれ

「寛」忘川よくみちなしと聞てこそいとふのかみも立はよりけれ

ただし、「も」のみ(岡田真旧蔵本・書陵部本・和学講談所旧蔵本)の本に対し、傍書に「はい」を付す写本(桂宮本・永青文庫本・御所本・榊原家旧蔵本松平文庫本・林羅山旧蔵本・兼築信行氏蔵本・田林義信氏蔵本・林崎文庫本)は多い。一方、寛文版本は、傍書「にい」をもつ。当該歌は、『夫木抄』一〇九七九番に採られ、また、『河海抄』一五一〇番にも見えるが、それぞれ本文は、「いとふのかみは」「いとふのうみの」である。これらの他出資料を勘案しても、『古今六帖』寛文版本の傍書の根拠は、助詞ひとつの違いではあるが、今のところ『歌枕名寄』万治版本本文のみである。

『古今六帖』寛文版本が刊行されたのは、『歌枕名寄』万治版本の十年後であるから、商業的な刊行は、『歌枕名寄』が『古今六帖』に先行する。もつとも、『古今六帖』には、岡山大学池田文庫や岩瀬文庫、三手文庫などに蔵される無刊記本が存在するから、刊記や版元が記載される商業的刊行に先立って、無刊記本の流布した可能性を考慮する必要もある。ただし、後刷りの場合も想定し得るから、無刊記本の検討は今後の課題である。少なくとも現時点では、それらの点を念頭に置き、かつ、『古今六帖』寛文版本のもととなるような本文をもつ、現存未確認の写本の存在を想定しつつもなお、『古今六帖』と『歌枕名寄』との作品の枠を超えた影響関係、場合によっては歌集の成立年代とは逆に、『歌枕名寄』万治版本が『古今六帖』寛文版本の本文に影響を及ぼすという可能性をも、考慮する必要があるのではなからうか。

『歌枕名寄』には、和歌を収集・整理するにあたり、批判的に採り入れられるという面がある。たとえば、次の六帖歌を見てみよう。

⑩『歌枕名寄』巻第二十六、出羽国、六八七三番 題「別島」

六帖

わかるれどわかるとも思はず出羽なるわかれのしまのたえしと思へば  
右六帖本歌雖不審暫載之、追而可詳之

この歌に見える「わかれのしま」は、『新編国歌大観』にも他例がない。『古今六帖』諸本においても、本行本文は「つるかのしま」<sup>(35)</sup>であり、「わかれのしま」は、寛文版本の傍書からかうじて知られるのみである。

〇『古今六帖』巻第三、一九〇八番 題「しま」

「桂」わかるれと別とおもはずいはなるつるかのしまのたえしと思へは  
へは

「寛」わかるれと別れと思はずいはなるつるかの嶋の絶しと思へは  
この寛文版本の傍書が、『古今六帖』において本行本文文化した伝本は、今のところ管見に入らない。

ここで注目すべきは、『歌枕名寄』万治版本が、「右六帖本歌雖不審暫載之、追而可詳之」と記している点である。この注記は、永青文庫本にも、「本哥六帖雖在不審暫載之」と見えるところであった。「追而可詳之」の記述は、流布本系の書陵部本と佐野文庫本、そして先の万治版本にあり、どうやら後に付加された部分のようである。ちなみに「六帖」の集付も、永青文庫本にはなく、書陵部本・佐野文庫本・万治版本にある。

『歌枕名寄』が「不審」とした具体的な内容は、必ずしも明確ではな

い。『歌枕名寄』撰者が確認し得る『古今六帖』伝本では、当該歌が「わかれのしま」ではなかったか、あるいは、この歌枕の存在そのものに対する疑念であったかもしれない。この歌の「わかれのしま」という本文の由来は、未だ特定できないが、ここでは『歌枕名寄』が編纂当時から「不審」としているらしいことに留意しておきたい。

なお、『夫木抄』では、「つかるのしま」「つがるのはま」として二箇所に掲出される。同じ類題集といえども、『歌枕名寄』とは異なり、『夫木抄』は複数の伝本からそれぞれに、和歌をそのまま写し取るといった傾向があるようである。<sup>(36)</sup>

※『夫木抄』巻第二十三、一〇四九三番

つかるのしま、出羽

題不知、六帖三

読人不知

わかるれど別るとおもはず 出羽なる つかるの鳥の たえじと思へば

※『夫木抄』巻第二十五、一一七六四番

つがるのはま、出羽

雑歌中、六帖

読人不知

わかるれどわかるとおもへば いではなる つがるのはまの たえじ  
とぞおもふ

「いではなる」と詠まれていることで、出羽国の歌枕であることがわかるとはいえず、本文がこれだけ揺れている。ということは、『歌枕名寄』の「わかれのしま」は、元来その地名であったというよりもむしろ、「わ

かるれど」「わかるとも思はず」という「別る」という語の繰り返しから生まれた言語遊戯に根差した地名であり、むしろ『古今六帖』の「つるか」や『夫木抄』の「つかる」「つかる」の中に、元々の歌枕の痕跡が残っているのかもしれない。

このように、『歌枕名寄』が「不審」とする本文を、『古今六帖』寛文版本が傍書としてもつ例がある。しかもそれは、寛文版本の中で唯一、「一本」と記される傍書なのである。他の傍書とは異なる記し方であるのは、ひよつとすると、『歌枕名寄』が「不審」としたことに関わりがあるのかもしれない。これ以上の憶測は差し控えるが、この一例をとってみても、『歌枕名寄』が拠った現存未確認の『古今六帖』伝本の存在を想定する一方で、『歌枕名寄』本文が『古今六帖』寛文版本に影響を及ぼすという可能性にも、一考の余地があるように思われる。

## 九 まとめ

従来、『古今六帖』の本文研究では、寛文版本が、写本系本文との間に、少なからぬ本文異同を有することについて、版本刊行までに「意識的な校訂」<sup>(37)</sup>が施されているのではないかと指摘されてきた。版本刊行前に本文を整えようとする欲求が生まれることは想像に難くないが、実はそれ以前、『歌枕名寄』にも、『古今六帖』の版本系本文の片鱗を窺うことができる。

その中で、『歌枕名寄』永青文庫本に載る本文は、書写奥書に記される文禄三年（一五九四）には、すでに『古今六帖』版本系本文の一部が出現していることになる。この翌年、文禄四年は、『古今六帖』の写本中、

最も古いといわれる永青文庫本の書写奥書に記される年である。つまり、十六世紀の終わりには、『古今六帖』本文は、写本系本文とともに、版本系本文の一部が存していたと推察される。

また、『歌枕名寄』の主要伝本六本に共通して収められ、かつ、本文異同のない六帖歌については、『歌枕名寄』そのものの成立時期として推定されている十四世紀初めまで、『古今六帖』版本系本文の一部の出現時期を繰り上げられよう。

とはいえ、『歌枕名寄』の本文が、そのまま『古今六帖』寛文版本の本文に全く一致するというのでは当然ない。そもそも、名寄所収六帖歌は、『古今六帖』本文を間接的に知る資料に過ぎないのである。しかしながら、古写本が未だ見出されない『古今六帖』の、写本系には見られない、寛文版本特有の本文の存在が垣間見えるという点で、やはりその本文は看過できないであろう。本稿で採り上げた本文異同は、いずれも微細な用例であるが、現時点では、寛文版本本文の片鱗を、こうやって積み上げていくしかないのである。

版本の版下とする本は、諸本の校合を経て作られる場合がまま見受けられる。『歌枕名寄』万治版本についても、版下を書いたとされる南可（一六一二―一六九二）は、大阪城代であった青山宗俊（一六〇四―一六七九）と、その子孫、忠雄・忠重の三代に仕え、古典籍の収集・校合に関与し、『歌枕名寄』刊行の万治二年頃は、洛北下鴨に隠棲していた人物で、その本文批判には、不審箇所を見抜く能力と、みだりに校訂の手を加えない姿勢が貫かれているという。<sup>(38)</sup> おそらく『古今六帖』刊行時にも、これに類する校訂の手が加えられたと推察される。現時点では『歌枕名寄』にしか見られない本文、中でも流布本系や万治版本のみに

見られる本文が、『古今六帖』寛文版本の本文や傍書に一致する場合があるという点も、両歌集が成立年代の前後を超えて、相互に影響を及ぼし合いながら伝来していくという状況を想定させるであろう。これは、それぞれの類題集が、表現類型を希求し原典回帰を目指した結果ではなかったか。

そもそも、類題和歌集である『古今六帖』には、勅撰和歌集に見られるような規範意識はない。作歌のための手引書としての面を考慮すれば、散逸を防ぐためにも、歌稿類を増補していった時期があったようにも見受けられる。<sup>(39)</sup> また、類似した表現の歌が並んでいるため、目移りによる脱落や、定型表現に引かれた誤写も起こりやすかったであろう。

『古今六帖』が成立したとされる十世紀後半という時代の和歌は、『後撰集』や当時の多くの私家集に見られるように、比較的長い詞書に支えられたものであった。そのような性格の和歌を、詠歌状況から独立させ、類題集にまとめるということ自体、当時としてはいささか無謀にも思えるが、そうやって和歌の自立を促したのが類題集『古今六帖』の存在意義のひとつだったのであろう。また、類題という場そのものが、増補・脱落・誤写などによって、表現のバリエーションを生み出す舞台にもなったはずである。そしてさらに、歌枕においては、その後ほとんど用いられない多くの地名が詠まれており、歌語としての定着を見ずに終わったものも少なくない。

そのような時代の和歌を、歌語がある程度定着した後世から眺めた時、そこには、不完全にも見える和歌表現のかたちがある。『古今六帖』において、「山」「川」といった大まかな題で類別されていた歌を、『歌枕名寄』では、歌枕ごとにさらに細かく分類・整理し、それが存在する

国まで特定するという意図がある。その際には、『古今六帖』本文に向き合い、歌枕を具体的に把握・認定していくという作業がぜひとも必要になってこよう。このような、単なる書写活動とは異なる、和歌の再整理・再編纂の姿勢は、六帖の現存する写本系本文から見れば、過剰な本文校訂・原典回帰と思われる例も見受けられるが、それこそが和歌本文の生成と享受の本質であり、それが如実に表れるのが、類題という場なのではあるまいか。

## 註

- (1) 『図書寮叢刊 古今和歌六帖』下巻、解題(昭和四十四年三月、養徳社)。  
 (2) ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本ほか。  
 (3) 『古今和歌六帖の研究―細川家永青文庫本及び松平文庫本を中心として―』(『国語と国文学』第四十二巻一号、昭和四十年一月)。  
 (4) 桂宮本の影印に拠り、適宜読点を付した。  
 (5) 『歌枕名寄所収の古今六帖歌と古今六帖拾遺歌』(『平安文学研究』第五十四輯、昭和五十年十一月)。  
 (6) 渋谷虎雄氏編、桜楓社、昭和五十二年三月。  
 (7) 以上、『和歌文学大辞典』(二〇一四年十二月、株式会社古典ライブラリー)「歌枕名寄」の項(黒田彰子氏)。  
 (8) 渋谷虎雄氏編『校本詞枕名寄 研究索引編』(昭和五十四年二月、桜楓社)九九頁。  
 (9) ひめまつの会、一九七二年二月、大学堂書店。  
 (10) 国書目録叢書30『北岡文庫蔵書解説目録―細川幽齋関係文学書―』(熊本
- 大学法文学部国文学研究室、昭和三十八年七月。平成十年五月に大空社より復刊。)所収「御歌書目録」には、「一ここん六でう」の右に「内三幽齋御筆」とあり(八二頁)、第三帖が幽齋筆であると考えられる。  
 (11) 二〇一〇年度～二〇一三年度(平成二十二年度～二十五年度)課題番号22520209。  
 (12) 伝本名は、次の通りである。永青文庫蔵本・書陵部蔵御所本・書陵部蔵桂宮旧蔵本・大久保正氏旧蔵岡田真旧蔵本・福留温子氏蔵大久保正氏旧蔵榊原家旧蔵本・島原松平文庫蔵本・内閣文庫蔵林羅山旧蔵本・兼築信行氏蔵本・田林義信氏蔵本・神宮文庫蔵林崎文庫本・神宮文庫蔵宮崎文庫本・内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本・寛文九年版本。なお、寛文九年版本は、黒田氏の報告書では、新潟大学附属図書館佐野文庫蔵本に拠るが、本稿では架蔵本を参照した。
- (13) 渋谷氏注8文献によれば、諸本は次のように分類されている。
- A 非流布本系
- 第一種 永青文庫蔵細川幽齋自筆本  
 第二種 高松宮家蔵本  
 第三種 静嘉堂文庫蔵本  
 第四種 陽明文庫蔵本
- B 流布本系
- 第五種 (甲類) 宮内庁書陵部蔵本・内閣文庫蔵本・京都大学附属図書館蔵近衛本  
 (乙類) 澤瀉久孝博士蔵本・天理図書館蔵(旧西荘文庫蔵)本・天理図書館蔵(旧竹柏園蔵)本
- 第六種 佐野文庫蔵本

(14) 注10前掲書所収「御歌書目録」には「一おほなよせ」の右に、内六一八  
幽齋御筆」とあり(八二頁)、第六六八が幽齋筆であると考えられる。

(15) 頁数および歌番号は、『校本 詞枕名寄 本文篇』に拠る。

(16) 『夫木抄』一三一八四番にも、信実朝臣の歌として収められている。

(17) 『歌枕名寄』 版本では巻第二十八だが、永青文庫本では巻第二十七に配さ  
れている。

(18) 写本間の異同は、「さはく ゆちかはの」(宮崎文庫本) という傍書のみ。

(19) 「六帖」の集付がある写本は、書陵部本・陽明文庫本・佐野文庫本の三本  
である。

(20) 諸本の異同は「うたしのやま」(永青文庫本)、「□たしめやま」(宮崎文庫本)  
のみ。

(21) 以上二箇所傍線部分に諸本異同なし。以下、傍線部分に異同がある場合  
にのみ註を付す。

(22) 異文「よろつ川」(林崎文庫本)あり。また、宮崎文庫本には「よなつ河」  
の朱書き傍書が見られる。前者は字形の類似による誤写か。また後者の朱  
書き傍書は、版本との校合の跡と見られる。

(23) 『歌ことば歌枕大辞典』「袴衣」の項(中川博夫氏)。

(24) 『新編国歌大観』夫木和歌抄解題(濱口博章氏・福田秀一氏)に拠る。

(25) 『歌枕名寄』の成立年代に関する考察(『国語と教育』(大阪学芸大学国  
語国文学研究室) 一号、一九六五年二月)。

(26) 『歌枕名寄』伝本の研究 研究編 資料編(和泉書院、二〇一三年二月)  
七七〜七九頁。

(27) 以下、『夫木抄』の引用は『新編国歌大観』に拠り、適宜、人間文化研究  
機構国文学研究資料館文学形成研究系「本文共有化の研究」プロジェクト

編『夫木和歌抄データベース 付九州大学付属図書館蔵「夫木集 漢雲抄」  
翻刻』(国文学研究資料館研究成果報告、平成十七年度)を参照する。

(28) 静嘉堂文庫本は欠本。永青文庫本になくて高松宮家本にみえるもの。

(29) 写本間の異同は「祝へらす」(宮崎文庫本)、「祝へらす」(和学講談所旧蔵本)  
のみ。

(30) 渋谷氏注8前掲書二二二頁。

(31) 当該歌は、『夫木抄』巻第二十二、二〇〇二番にも次のように収載される。

かたびらのもり、国末勘之、かたこひのもり、陸奥なり

題知らず、六一二

読人不知

かたびらのもりのこのはちりぬともおもひはやまのまつぞかはらぬ  
「かたひら」という本文は、強いていえば『古今六帖』写本系本文「かた  
らひ」に近い。一方、題の傍書は「かたこひ」本文を示しており、『古今  
六帖』寛文版本と一致する。さらにそれを「陸奥」の歌枕とするのは、『歌  
枕名寄』流布本および万治版本と同じ見解である。

(32) 集付「六帖」は、永青文庫本になく、書陵部本・陽明文庫本・佐野文庫本  
にある。

(33) 『国書総目録』に拠る。

(34) 川瀬一馬氏『入門講話 日本出版文化史』(エディター叢書33、日本エディ  
タースクール出版部、昭和五十八年七月)に拠れば、「正保・慶安頃までは、  
まだ無刊記本が先ず出版されて、その無刊記本が再版されたり、後で摺ら  
れたりする場合に、本屋の名前が入っている」(二八九・一九〇頁)という。

(35) 「つかるの嶋」(田林義信氏蔵本)の異文あり。

(36) 第六節⑥の用例に関連して採り上げた、『夫木抄』の歌二首も同じ傾向を  
もつ。

(37) 注3前掲論文参照。

(38) 上野洋三氏「『歌枕名寄』の板下筆者」(『近世文芸』第五十六号、一九九二年七月)。

(39) たとえば、『順集』一七二～一七四・一七七番の四首は、「大納言源朝臣、大饗のところにとつべき四尺屏風調ぜしむるうた」の歌であるが、『古今六帖』ではそれぞれ、第一帖「神まつり」八六番、第二帖「ともし」一一七〇番、第一帖「なごしのはらへ」一二〇番という、題の末尾に置かれており、残る一七七番も、『古今六帖』第一帖「こまひき」題の末尾から二首目、一八一番に配される。このことから、これら一連の屏風歌は、『古今六帖』の根幹部分ができた後、増補された可能性がある。また、同じ『順集』の「あるところの前裁あはせ(天禄三年(九七二)八月『女四宮歌合』……筆者注)の歌の判」に見える歌、一五八番も、『古今六帖』第一帖「はつあき」題の末尾、一三二番に位置している。前述の順の屏風歌と同様の状況が想定され得るであろう。

## 附記

本稿は、平成二十七年度和歌文学会第六十一回大会における研究発表の内容の一部である。その際、多くの方々からご教示いただいた。厚く御礼申し上げる。

また、本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」(同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号25330403、いずれも平成25～27年度)における研究の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器<sup>1)</sup>e-CSA Ver.2.00、を使用した。